

令和4年4月4日

## 黒川開拓団遺族会の声明文を受けて

満蒙開拓平和記念館  
館長 寺沢 秀文

今般、黒川開拓団遺族会が出された声明文を受けて以下の通りコメントさせていただきます。

私共は 2013 年 4 月に長野県阿智村に国内初の「満蒙開拓」をテーマに開館した民間運営の記念館です。かつて国策のもとに「旧満州国」へ渡った開拓団。多くの惨い犠牲があった一方で、中国側などにも犠牲を強いた加害の面も持つ歴史であり、さらに国策として推進した立場の人々等にとっても向き合いにくい史実であったため、戦後はほとんど語られないまま、社会の中でも顧みられないまま、風化しつつありました。しかし、今こそこの歴史に向き合い、学び、伝えていかなければならないという思いから、史実継承の拠点となる記念館を立ち上げ、運営しています。その設立趣旨に賛同される多くの皆様方との交流も多い中で、今般の黒川開拓団遺族会の皆様とは開館前から同じ志を持つ立場として交流させていただいています。

その黒川開拓団での出来事を主題として今般出版された平井美帆氏の書籍については、テーマとしての重要性等は理解するものの、その内容については問題点もあると思われるところから、黒川開拓団遺族会よりの今般の声明文を受けて、これを支持すると共に、当館としての受けとめや考え方を、以下の通り表明させていただきます。

### 1. 現在の「黒川開拓団遺族会」の活動姿勢について

犠牲となった女性たちが、初めて公の場で自らお話をされたのは当館の「語り部」定期講演でのことであり、それは遺族会の皆さんが女性たちの思いに寄り添い、語る場として勧めてくださったからこそ実現したものでした。平井氏はこの講演での話を知って遺族会に連絡をとり、女性たちを紹介され、取材を始められています。その際の遺族会の協力なくしてはその取材も十分には出来なかったと思います。遺族会はその後も各種メディア、団体、研究者等からの問い合わせや取材に丁寧に対応し、そのオープンで協力的な姿勢があつてこそ、黒川開拓団での悲しく惨い史実を多くの人々が知ることとなりました。この間、黒川開拓団に対してのさまざまな厳しい意見も受けたと思いますが、女性の皆さんの思いを受け止め、史実を語り継ぐという「勇気と覚悟」をもって真摯に対応され、謙虚に耳を傾けてこられました。今の遺族会の皆さんは戦後生まれの二世、三世でありながら、それまで「不都合な史実」として遺族会の先代の方々が蓋をしてきたものの、沈黙に抗い、今できることを精一杯やり、それを知った多くの人々も一緒になって向き合おうとしてきたのだと思います。

今の黒川開拓団遺族会が、そのように真摯に向き合う誠実な人々でもあることを多くの皆様にもぜひ知っていただきたいと思います。

## 2. 満蒙開拓の史実を受け止める者の立場として

「満蒙開拓」は結果として被害者であると共に、内なる加害も含めて加害者でもあったという複雑な歴史です。それが故に不都合な史実として語られてこなかった中で、当記念館でもそれぞれの立場の思い等を受け止め、語り継いでいきたいと願っています。被害者となった皆さんへの配慮等は元より、結果として加害の立場となった皆様の思いも受け止めていきたい、そしてその際に大切なことは勇気と覚悟を持って語ってくださる皆さんに対する配慮や思いやりであると思います。

今回の本の中でも、被害を受けた女性の皆さんの思いをきちんと受け止めておられることは高く評価いたしますが、同時に結果として加害の立場となった皆さんやその関係者の皆さんが、今、覚悟を持ってこれを受け止め、語り継ごうとされている姿勢についてもきちんと伝え、その皆さんに対する配慮や思いやりも考えて頂ければ良かったのにと残念に思っています。

## 3. 実名記載されていることへの懸念

この本には、戦後の遺族会が女性たちを傷つける行為や言葉を浴びせていたことが実名で書かれています。もちろん、証言された方々の話を否定するものではありませんが、内容が内容であるだけに、伝聞や噂といった不確かな情報に基づいて、承諾もなく実名で書かれていることについては違和感を持たざるを得ません。その内容が、女性たちの身体だけでなく尊厳を傷つける酷いものであるだけに、逆に実名使用は人を貶めることになりかねません。

誠意を感じられない取材者によって、取材された側が傷つき、再び口を閉じることのないよう望みます。また、今回のようなことが性暴力に向き合おうとする人々にも不信感を与え、歩みを止めかねないことも危惧しています。

今回の件のみならず、メディア界、出版界等においても実名報道等することへの慎重さが改めて求められると共に、慎重さを欠く実名報道等に対して安易な評価がなされること等が無いことを願いたいものと思います。

## 4. 改めて「満蒙開拓」の史実の継承について考える機会を

「満蒙開拓」という歴史に向き合うことは、不都合な史実にも突き当たることとなります。しかし、その責任の断罪や個人の糾弾以上に、対話による和解や学び、共感の拡がりがある歴史に立ち向かう力となり、その罪さえも自分事として捉える勇気になるのではないのでしょうか。平井氏がこの歴史から社会に訴えようとすることは、私たちと共有できるものであると思うだけに、今回の書籍に関しては残念に思います。

二度と同じような犠牲を出さないためにも、満蒙開拓や戦争等の史実から学んでいくことの積み重ねが必要です。しかし、それは単なる責任追及等としてであってはならず、それにより新たな憎しみや対立を生み出すものであってはならないと思います。

今回のことをも契機として、改めて平和や命の尊さ、人権の尊厳等について考えてみる機会としたいものと思います。

(以上)